

粟津邦男先生を偲ぶ



追 悼

(一社) 生産技術振興協会 理事長
堀 池 寛

In memory of Prof. Kunio Awazu

粟津先生は、来年3月に大阪大学の退官を控えておられた。誰が先生の急逝（本年5月20日）を想像できただろうか。その退官記念事業式典では、先生の数え切れない輝かしい業績が語られるはずであった。きっと、あの満面の笑みと大きな包容力で会場を包み込んでいたであろう。

先生は、平成12年4月に株式会社自由電子レーザー研究所が阪大に移管されると同時に阪大の教員として赴任して来られた。お会いしてすぐに誰からも愛される人柄と人間性、そして研究内容に魅了された。

同研究所は通産省（当時）の肝入り事業として設立され、先生はその極めて重要な分野（量子プロセスによる生体分子制御の研究）を指導されていた。

この年に阪大にこられてからは、光とレーザーによる斬新な病気治療の研究を始められた。先生のリーダーシップにより医学部や歯学部の先生方との連携が一層深まり、「知的クラスター創成事業」や「21世紀COEプログラム」といった大型の研究プロジェクトが始動し、先生を中心に展開されることとなった。研究室には学部の垣根を越えた先生方の交流が生まれ、これまでにない活気を阪大にもたらした。

また、粟津先生の研究テーマはNHKや民放各局、大手新聞等でも多く取り上げられたが、中でもTV東京の科学番組で粟津研究室のテーマである、「自由電子レーザーで肉を切る」という趣旨の番組が放送されたことも強く印象に残っている。先生は、90年代から発展した特定の分子結合準位に波長を調節し共鳴させる強力なレーザー光を照射することで生体組織を改変・加工する研究を率いておられ、その研究の第一人者として、世界的に著名であった。

先生は大学院を修了して住友電工に在職され、研究員として平成5年から米国テキサス大学MDアンダーソン癌研究所で研究に邁進された。平成8年に神戸大学から工学博士を、平成9年に順天堂大学から医学博士を授与されている。

その当時、先生が研究開発された指尖に装着した光学素子を使用して無侵襲にて肝色素代謝を連続的に計測する方法は、それまでの採血法に代わり今や幅広い医療機関にて患者の治療に用いられている。

阪大に来られてから生体細胞における色素代謝動態の把握に関する研究や、赤外レーザー光を光ファイバーを使用して動脈硬化部位に導入し、コレステロールを除去治療するという画期的な研究を進められた。さらには、レーザー光によるイオン化質量分析法を開発されて、従来解析が困難であった非常に重たい蛋白質の質量スペクトルの取得を実現することで、病気の原因物質の解明に大きく貢献された。

病気治療の新しい手法としての光やレーザーの利用に、先生は人生をかけておられた。

それに加え、先生は多くの優秀な研究者や社会人も輩出された。医学物理士制度の検討委員会の幹事を通じて同制度の発足にも貢献されたほか、多くの委員会と学協会でも多角的に活動された。

画期的な研究の数々を行う傍ら、芸術や美を愛するそのお人柄は、自然と周囲に明るさをもたらした。印象深いエピソードがある。先生が阪大の環境エネルギー工学に異動されてから研究室の建家が改修された。先生は倉庫の奥から原子力工学教室創設時の古びた木板墨筆の看板を掘り起こしてきて、きれいに補修して玄関ロビーに展示された。また図書館の木の椅子を廃却直前に救い出して再利用される等々、先生の手にかかると古い物も美しく生まれ変わり、存在感を発揮し始めるのが不思議でならなかった。長らく先生の秘書をされていた宮崎陽子さん

は、「ある日出勤したら、どーんと大きな西洋画が飾られていてびっくりしたことがあります。驚いてどうされたのかと聞いたら、出張の時に立ち寄った銀座の絵画展で『真珠の首飾りの少女』に出会い、思わず買ってしまったとのことでした。また12月になると玄関ロビーに大きなクリスマスツリーを飾り、周囲がぱっと華やいだのも印象深い思い出です。すべてにお洒落な方でした」と話されている。

またある時、我が家で年度末の恒例となっていた学生の食事会に、先生の研究室のメンバーも参加されることになった。その際、両手で抱えきれないほど大きな花束を持ってこられたお姿は、妻や娘たちに大きな驚きと感動をもたらした。この出来後は、今でも我が家の語り草である。

学問だけではなく、美やスポーツも愛し、どんな時も一途な姿勢を貫き、常に相手を思いやる心を忘れない、本当に素晴らしい先生であった。

先生のことを思うとき、先生の研究室のあたたかい雰囲気を、今でもありありと思い出す。部屋に入ると、「いらっしゃい、お元気ですか」というにこやかな声と共に、私たちは木のテーブルと椅子に腰掛けて話をする。壁の作り棚には、賞状や楯等の記念品が置かれ、脇にはスーラの名作「グランドジャット島の日曜日の午後」の大きな絵画が飾られている。窓の外テラスには、アウトドア用のテーブルセットがおいてあり、工学部や医学部の先生方やお客が集まり談笑しておられた。

淋しい悔しい気持ちがつのるばかりだが、先生の残された多大な業績と志を受け継ぐ若い研究者たちの活躍を期待しつつ、ここに深く哀悼の意を表したい。

令和5年8月

